

うつ病をモニタリングする技術

教授・竹林 実

大学院生命科学研究部 臨床系 神経精神医学講座 神経精神科

▶ 研究内容

【背景・目的】

うつ病は、生涯有病率が高く10程度と言われており、現在医療機関にかかっている患者数は100万人を超えるとされている。また、抗うつ薬が効果が得られるのは約5割であり、薬剤の効果があっても約5割の患者は再発するという根治が非常に難しい精神疾患である。

現在使用されている抗うつ薬は、モノアミンと呼ばれるアミノ酸から合成される神経伝達物質 ノルアドレナリン、セロトニン、ドパミンを標的としている。

【研究概要】

- 現在よく研究されている抗うつ薬は、主に神経細胞を標的としているが、本技術はグリア細胞を標的としている。
- グリア抗うつ薬受容体 LPA1 のリガンドである脂質LPAの合成酵素であるオートタキシン ATX に着目した。
- うつ病患者において、健常者と比較して有意にATX濃度が低下し、血中ATX濃度は抑うつ症状と負の有意な相関がみられ、治療により、ATXは有意に増加した。

▶ 提供できる技術

- 新規抗うつ薬の開発 ・ うつ病患者のモニタリング

▶ キーワード

LPA1 グリア細胞 抗うつ薬 Glial cell antidepressant 医歯薬学領域 内科系臨床医学 精神神経科学

《ご連絡先》 コーディネータ 藤江 康光 TEL 096-342-3209 FAX:096-342-3239 mail:y-fujie@jimu.kumamoto-u.ac.jp